

## 【参考資料 1】

### 住民の避難行動に関する成功事例

住民の避難行動について、市町村による避難情報の発令等に基づいて、住民が自ら、又は自主防災組織等により声を掛け合いながら指定緊急避難場所に避難することが基本的な避難行動であり、それが成功事例と言える。このとき、市町村が避難情報の発令の仕方を工夫した事例が見られる。

また、災害が差し迫っているなどのため、住民自身や消防団等の判断により次善の避難場所又は屋内の安全な場所に避難することも次善の避難行動であり、成功事例と言える。

なお、これらのうち、住民が避難した後に土砂災害や洪水浸水等が発生して、現実的に人的避難を免れた事例が見られる。

#### 【基本どおりの避難行動が行われた事例】      うち人的被害を免れたもの：◇

##### <共助>

- 避難勧告の発令を受けて、自主防災組織の役員・消防団員が危険な地域を一軒一軒回って避難を呼びかけ、多くの住民が市指定の避難場所に避難した。
- 自主防災組織役員が高齢者宅を訪問し避難所開設情報を伝え、情報を聞いた住民が市指定の避難所へ避難した。
- 避難情報の発令を受け、民生児童委員が高齢者等に一軒ずつ声掛けをした。
- 平成25年台風18号襲来時（府内初の特別警報発表。避難指示発令）
  - ・ 自主防災組織の役員が団地内を一軒ずつ訪問し、避難を呼びかけた。
  - ・ 要配慮者が、近所の方と一緒に車で避難した。
  - ・ 浸水域内の避難所で、車いすの方を若い人たちが担いで上階へ避難させた。

##### <公助>

- 7月豪雨時に、日没後に行動が制限されることを避けるため、ダム管理者及び河川管理者からの連絡を参考に、基準より早めに避難指示（緊急）を発令した。結果として、最大944人の市民が指定緊急避難場所に避難することができた。
- ◇ 河川が氾濫する前に避難勧告を発令しており、発令の際に避難所への避難や家の2階等へ垂直避難をするよう防災無線やエリアメールで呼びかけ、その後、家の1階部分が床上浸水になる事案が発生したが、死傷者は出なかった。

## 【次善の避難行動が行われた事例】 うち人的被害を免れたもの：◇

### <自助>

- ◇ 7月豪雨災害による土砂崩れで住家が全壊する被害があったが、住民はすでに2日前に安全な家族宅に避難していた。当該地域では、5年前にも同じ場所で土砂崩れが発生し、住家の手前まで土砂が迫った経験があり、以来、台風や大雨のたびに家族宅に事前に避難していた。5年間で避難は20回を超え、今回までは空振りだったが、5年前の経験を活かし、早めに避難することで命を守ることができた。
- ◇ 前兆現象（におい、床に水が流入）があり、2階に避難した。その後、消防署に通報し、職員に避難を促されて土砂流入前に近所のお宅に避難した。
- ◇ 避難しなかったが、家が心配で山とは反対側の1階で就寝した。土砂崩れが発生したが、就寝場所までは土砂が到達せずに助かった。

### <共助>

- 7月豪雨災害において、市内に土砂災害警戒情報、大雨特別警報（土砂災害）が発表される中で、事前に地域のハザードマップを確認していた消防団員が、高齢者を地域内の土砂災害警戒区域外のお宅に避難誘導し、安全を確保した。
- 平成25年台風18号襲来時（府内初の特別警報発表。避難指示発令）
  - ・消防団員がパトロール中に高齢女性に支援を求められ、団員4人で浸水の危険のない2階へ運び上げた。
- ◇ 消防団員が、川が増水していることに気づき、避難勧告等の発令前であったが、避難が必要と判断し、集落を一軒一軒回って避難を呼びかけた。多くの住民はそれに応じて集落外にある町指定の避難場所に避難できた。一部の住民は、集落外への避難は間に合わなかったが、集落内の高台にあるお堂に避難して、一晩をやり過ごし、命を守ることができた。
- ◇ 7月豪雨で、自主防災組織・消防団による高齢者宅への避難の声掛けにより、避難誘導。その30分後に土砂災害が発生（全壊の被害）し、一命を取り留めた。

### <公助>

- ◇ 7月豪雨で土砂災害が発生し、二次災害の恐れがあったため避難勧告を発令し、市営住宅への移転措置を取った。その後、台風24号で再度土砂災害が発生し住宅は全壊したが、移転されていたため一命を取り留めた。